

英国のストーリーテリング・センターと ストーリーテラーズ・ガーデン

井上裕子*

The Scottish Storytelling Centre & The Storyteller's Garden in the U.K.

Yuko Inoue *

Received October 31, 2007

Abstract

Since the storytelling revival in the 1980s, Great Britain has seen oral narratives permeating the society. British people seem to regard storytelling as entertainment for all ages but rather as a powerful communication tool at school and working places. From June 23rd to June 30th in 2007 I visited Scotland and the Lake District with other Japanese for storytelling exchange. We met the local professional storytellers and visited a center for storytelling in each place. This paper focuses on the following two storytelling centers: The Scottish Storytelling Centre in Edinburgh and The Storyteller's Garden in Grasmere. The former, which was refurbished in 2006, is supported by the Scottish Arts Council Lottery Fund, the City of Edinburgh Council, Scottish Enterprise Edinburgh and Lothian, and charitable donations, keeping a partnership with the Church of Scotland and the Scottish Storytelling Forum. It is proud of its well-designed facilities such as a theater, a storytelling court, a library, a shop, a cafe, etc. where you can relax and enjoy the live art of storytelling or join a workshop to meet your level from novice to professional. On the other hand, the latter, which is called Tale Trust, is managed by a professional storyteller and his wife. They have leased the estate from National Trust since 2000 by accepting a certain condition. Although the facilities are small, the couple has kept the garden with a unique idea and attracts audiences. This paper examines how each center contributes to the public through storytelling.

はじめに

2007年6月22日から6月29日にかけて英国のスコットランドとイングランドを訪れた。主な

* 教育能力開発センター
Center of Development for Education

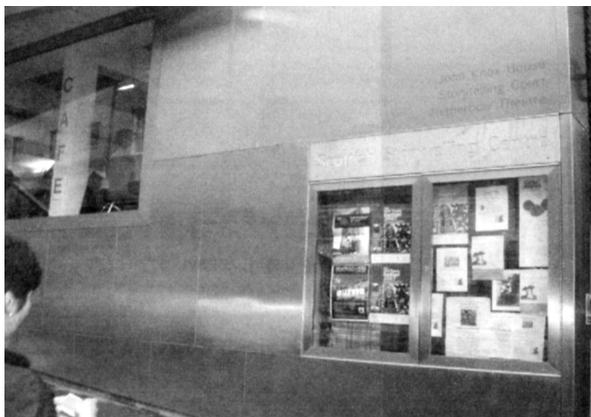
目的の一つは現地ストーリーテラーとの「語り」の交流であった。この交流は『語り手たちの会』¹⁾の代表、櫻井美紀氏の呼びかけで実現した。参加者は総勢17名。大半が『語り手たちの会』の会員であるが、日本独特の語りの文化の一つでもある「紙芝居」を紹介するため野間成之氏²⁾も一団に加わった。筆者は非会員であるが、櫻井氏からの誘いを受け特別に参加させてもらった。英国滞在中、我々は二つのストーリーテリング施設を見学した。一つはエジンバラにある The Scottish Storytelling Centre, もう一つはグラスミアにある The Storyteller's Garden である。前者はスコットランド全土をまとめる規模の大きな施設である。後者は1人のストーリーテラーとその妻が National Trust から土地と建物を借り受けて立ち上げた規模の小さな施設である。小論ではそれぞれのストーリーテリング施設の役割とその活動について考察する。

I. The Scottish Storytelling Centre

我々一行は2007年6月23日午後、エジンバラにある Scottish Storytelling Centre を見学した。当センターでコーディネーターを務める Caroline さんによれば「Scottish Storytelling Centre は世界初のストーリーテリング専門機関」ということであった³⁾。ロイヤル・マイルの坂道の途中にあるこの施設はエジンバラで最も古いと言われている John Knox⁴⁾ の住居跡と結合している。当センターはスコットランド芸術評議会・スコットランド開発公社・エジンバラ市議会・スコットランド教会の協賛の下、350万ポンド（約8億7,500万円）の総事業費（うち130万ポンド〔約3億2,500万円〕は国営宝くじ基金からの援助）と5年の歳月をかけ2006年6月にリニューアル・オープンした。当センターの歴史は1992年に遡る。当初は17名のプロのストーリーテラーたちからなるボランティア活動組織であったが、1997年には会員の数も47名にまで増え、組織は Scottish Storytelling Centre として Netherbow Arts Centre（現センターと同じ場所）の最上階に活動の場を構えたのである。

1. 館内施設

The Scottish Storytelling Centre in Edinburgh



二階がカフェ。
建物は通りに面している。
掲示板には当時開催中の Old Town Festival のポスターが貼られていた。

筆者撮影（2007年6月23日）

センターには下記の施設がある。

1) 売店

John Knox の住居跡から入るとすぐに一階の売店に辿り着く。売店ではストーリーテリングの関連書籍・CD・お土産などを販売している。書籍はスコットランドに関するものも揃えてある。

2) カフェ

センターの看板横にある階段を上ると二階のカフェに繋がる。軽食も可能。

3) The Storytelling Court (多目的ホール)

明るく広々とした空間は多目的ホールとしての機能を備えている。我々が訪問した日にはホールの壁に絵本の原画が並べられており、展示会場としても使われていた。

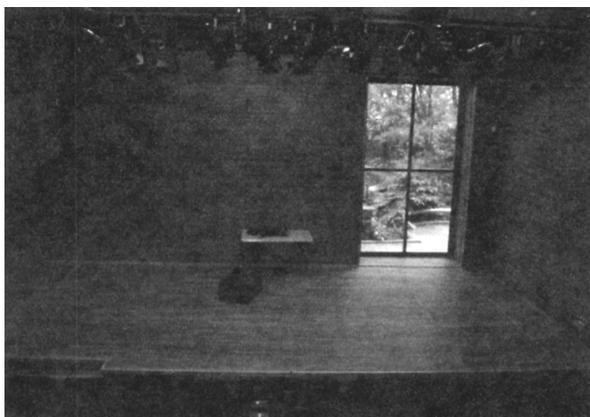
ホールの奥には Storytelling Wall (お話の壁) が間仕切りの役割を果たしながら立っている。Storytelling Wall には覗き穴が幾つもあり、中を覗くとスコットランドの有名なお話の一場面が人形などで再現されている。それぞれの扉を開くと本文とその一場面が立体的に楽しめるようになっている。

Storytelling Wall の裏側には「語りのコーナー」がある。暗幕を背景に語り手用のゆったりした木製の椅子が置かれ、その前に聞き手用の椅子が何脚も準備されている。ここでは十数名を対象にお話ができる。また、この語り手用の椅子の向かい側の角にも椅子がもう一脚置かれている。ここには聞き手の椅子は置かれておらず、オープンスペースになっている。

4) The George Mackay Brown⁵⁾ Library (図書館)

会議室 (40人程度収容) や訓練室としても利用可能。蔵書はこれからのようである。我々は現地ストーリーテラー John Fee 氏との交流場所として当図書館を利用させてもらった。図書館の隣りには給湯室があり、そこで準備されたお茶とお菓子で交流を楽しんだ。

The Netherbow Theatre



舞台の奥の窓から見えるのは庭である。劇場は会議やセミナーにも使われる。

筆者撮影 (2007年6月23日)

5) The Netherbow Theatre (劇場)

階下には階段式の劇場が完備されている。全99席の劇場はマイクを使わずに声を通る。舞台の奥には一部窓があり、外の景色も取り込めるようになっている。

6) City Bell (鐘楼)

屋上には鐘楼がある。1621年にオランダで鑄造された鐘は、イベントの際に鳴らされる。当センターのオープニングセレモニーでも鳴らされた。

2. センターの活動

Scottish Storytelling Centre は、ストーリーテリングを社会の全ての分野・全ての年代の人々に奨励・支援を行うことを活動の目的としている。特に、経済的理由・障害を持っているために芸術的体験が得られない人々に目を向けている。Scottish Storytelling Centre は、Scottish Storytelling Forum⁶⁾ と提携を結んで、ストーリーテラーの活動の場を広げる支援も行っている。センターが企画・広報・活動の取りまとめを行っているのに対し、Scottish Storytelling Forum はストーリーテリングの技術面を担っている。

Scottish Storytelling Centre の主な活動は下記の通りである。

1) イベント企画・広報

センターは毎年 Old Town Festival と International Festival と呼ばれる大きなお祭りを開催している。丁度、我々がエジンバラを訪れた 6 月 23 日は Old Town Festival 2007 (6 月 18 日～7 月 1 日) の期間中であった。Old Town Festival はスコットランドの文化・歴史・地域社会が三位一体となったお祭りである。お祭りの 2 週間はセンターの施設だけでなく図書館、小学校、博物館などでも様々な催し物が行われる⁷⁾。「物語」「詩」の語り・演劇・歌と音楽・映画と語り・詩人と街の散策・エジンバラ文学探訪・絵画展・トークショーなど子どもから大人まで楽しめる内容になっている。参加費も無料のものから 6 ポンドのものまでである。Old Town Festival ではスコットランドおよびエジンバラに所縁のある作家の作品などが披露される。6 月 23 日にはセンター内の劇場でエジンバラ出身の作家ロバート・ルイス・スチーブンスンの『誘拐されて』(Kidnapped) の二人芝居が上演されていた。

一方 International Festival はスコットランドと海外のストーリーテリングを特色に出したお祭りである。2007 年度 (10 月 26 日～11 月 4 日) は「Out of Eden (楽園から)」と題しアフリカを特集している⁸⁾。International Festival では海外のゲストも出演する。2007 年度は 30 の催し物が企画されている。催し物には講演会やワークショップ、ハロウィーン (10 月 31 日) のお話も含まれる。

その他に学校へストーリーテラーたちを派遣してストーリーテリングの普及活動も行っている。2005 年の International Festival ではロジアンにある 60 余りの学校で子どもたちがストーリーテリングに触れた。

2) 社会への教育支援

センターはストーリーテリングの講座をあらゆる年代の人々に提供している。講座数は優に80を越える。3歳の幼児が参加できる講座からプロの講座まで様々である。大人向けの講座では特に保育士や教員などを対象にしたものが多い。これは、センターがCPD訓練機関として協力しているからである。CPDとはContinuing Professional Developmentの略語で「専門能力開発講座」を指す。スコットランド教育省はCurriculum for Excellence（卓越したカリキュラム）には教員の専門技能向上が不可欠であると考え、外部団体に訓練を委託している。センターはその一つである。

子どもを対象にした講座は、ゲーム・身体的動作・音楽を取り入れたもの・再話の技術指導まで工夫を凝らした内容になっている。このように、センターは子どもたちにストーリーテリングを鑑賞する機会を与えるだけでなく、子どもたち自身がストーリーテラーとして学ぶ場も提供しているのである。谷川（2002）は、日本人の話し下手は小学校からの訓練が欠けていると指摘している。一方スコットランドではストーリーテリングが教育の一環としてみなされている。センターはスコットランド政府の方針「3歳～18歳の初等・中等教育においては幅広い体験が子どもたちの学びとなり、それは学校だけでなく学外の活動・行事を通してと言える」に充分貢献していると言える。

以下は講座のテーマのほんの一部である。

- 「地元の伝説」
- 「ケルト伝説」
- 「バラード」
- 「神話」
- 「山・丘・島などの自然の地形に関するストーリーテリング」
- 「ケルト語によるストーリーテリング」
- 「手話を使ったストーリーテリング」
- 「演劇を取り入れたストーリーテリング」
- 「聖書を取り入れたストーリーテリング」
- 「子どもや孫に語るためのスキルアップ講座」
- 「クラブ設立方法と維持についての講座」
- 「屋外でのお話のツアー」

さらにセンターは、初心者が打ち解けた雰囲気プロのストーリーテラーの指導を受けられるストーリーテリング・クラブの紹介も行っている。地域にクラブがない場合はクラブ立ち上げの助言もしている。

3) ストーリーテラー名鑑管理

現在、当センターには100名を越えるプロのストーリーテラーが登録されている。センターが開設しているサイト (<http://www.scottishstorytellingcentre.co.uk>) のNetworkにストーリーテラー名鑑が掲載されている。この名鑑に載っているストーリーテラーは全員 Scottish

Storytelling Forumのお墨付きを得ている。スコットランドを代表するストーリーテラー David Campbell氏⁹⁾によれば、Scottish Storytelling Forumから承認を受けるには下記の要件を満たさなければならない。

- ・ 2年以上のストーリーテリング経験がある
- ・ レポートリーがある
- ・ ストーリーテリング経験者からの推薦状がある
- ・ Scottish Storytelling Forumの会員に日頃の語りを現場で聞いてもらう

櫻井(2005)によれば、以前は候補者はScottish Storytelling Forumの審査員約10名の前で2時間～4時間の実演が課せられた¹⁰⁾。現在、このような長時間にわたる審査がない代わりに、候補者は通常エジンバラのストーリーテリング団体 Guid Crack Clubに招かれ、語りを披露することになっている。Guid Crack ClubはScottish Storytelling Festival(1989)が開催された翌年に結成された団体である。語り手と聞き手の枠を越えた、それまではなかった「来る者拒まず」のストーリーテリング団体である(Smith, 2001)。

ストーリーテラー名鑑には利用者に便利な工夫がなされている。二つの項目(聞き手・地域)を選択することでストーリーテラー名鑑から希望に合ったストーリーテラーを搾り出すことが可能である。

聞き手：5歳～14歳・大人・家族・保育所・小学校・中学校・特殊言語・無制限

地域：スコットランド全土を14箇所に分け

例えば、聞き手を「全て」、地域を「Edinburgh & Lothian」で選択し検索すると40数名のストーリーテラーが搾り出される。さらに、各ストーリーテラーのプロフィールを見ることでストーリーテラーとしての経験や得意とするレポートリー・語りの特徴を知ることができる。プロフィールには本人の顔写真・住所・連絡先・電子メールアドレスなども掲載されている。

4) 料金設定

センターに登録しているストーリーテラーは全てプロである¹¹⁾。従って、彼らのストーリーテリングには報酬が伴う。センターは目安となる料金設定(2007年10月現在)を次のように提示している。

研修会

NPOやボランティア団体：	半日150ポンド	1日225ポンド
公共機関：	半日230ポンド	1日350ポンド
企業：	500～1,000ポンド(内容による)	

鑑賞会

半日120ポンド+税金
1日200ポンド+税金

センターはどのストーリーテラーに依頼するか相談も受け付けている。また、ストーリーテラー名鑑を活用して直接ストーリーテラーに交渉することも可能である。センターのサイトには依頼者が交渉の際にすべき確認事項も列挙されている。その他に特記事項として次のようなものがある。

- ・参加者が全員座れる場所（静かな空間が理想、声の反響面から小さめの部屋が好ましい）を確保
- ・ストーリーテラーが使用するトイレ・お茶やコーヒー・昼食の配慮
- ・ストーリーテラーに水を準備
- ・責任者が必ずその場にいること。特に学校が依頼主の場合は必ず教師が子どもたちについていること

このようにセンターはストーリーテラーが地域で気持ちよく活動ができるよう料金と予約について細かなルールを設けている。

以上が The Scottish Storytelling Centre の主な活動である。当センターが開設するサイトにはストーリーテリングに関するイベント・研修・集会・話題が満載である。ストーリーテリングを楽しみたい人・これから始めたい人・プロ・アマを問わず技術を高めたい人、目的に合わせて利用が可能である。

II. The Storyteller's Garden

The Storyteller's Garden は人口1,000人に満たないグラスミアという小さな村の中心にある。北イングランドの湖水地方にあるこの美しい村は、桂冠詩人 William Wordsworth (1770～1850) が住んでいた土地として有名である。我々が The Storyteller's Garden を訪れたのは6月25日の午後であった。鴨が水浴びする小川、緑の木立、古い建造物は悠久の昔を思わせる。村全体が息を呑むような美しさであった。

The Storyteller's Garden と同じ敷地内に The Northern Centre for Storytelling がある。我々はその建物の中にあるスタジオで館長兼ストーリーテラーである Taffy Thomas 氏とその妻 Chrissy 夫人から歓待を受けた。まず、Taffy から The Storyteller's Garden ができた経緯と本人がストーリーテラーになったきっかけを聞いた。その後でもう1人のストーリーテラー、Nick Hennessey¹²⁾ も交えて日英のストーリーテリングの競演を楽しんだ。お客として地元のシェフや旅の途中の一組のインド人夫婦も加わった。

1. 建物と庭

センターの建物と庭は前者のような地方自治団体の支援を得て設立されたものではなく、Thomas 夫妻が2000年に National Turst から借り受けて始めたものである。建物の歴史は確認できる限りでは17世紀にまで遡る。宿屋として利用された時期が長く続き、その後、市場と苗木仕立場として使われた。National Turst が買い取ったのは1968年のことである¹³⁾。

夫妻は20年以上に亘り芸術一座 Dancetales を運営し、いつか自宅の一室から小さな事務所に引越してできる日を願っていた。そんな折、National Turst から建物を借り受けるチャンスが到来した。National Turst から提示された条件は 建物に附属する荒れた土地を開拓し再生させることであった。夫妻は友人の協力を得て鬱蒼とした土地をお伽話に出てくるような魅力的なストーリーテリングの庭に作り上げていった。

1) センターの建物

センターは道路沿いに立っている。サーモンピンクの外壁には薔薇などの植物が美しく花を咲かせ、建物全体が優雅な雰囲気を出している。建物の中に入ると、カウンターのあるインフォメーション・センターがあり、奥にはスタジオがある。我々はそこでストーリーテリングの交流を行った。暖炉とソファがある一般家庭の居間のようなスタジオは二十数名でいっぱいになった。暖炉の横にはストーリーテラーの大きな椅子があり、暖炉の上や壁には Taffy のこれまでの足跡がわかる写真や記念の品々が飾られていた。

The Northern Centre for Storytelling in Grasmere



看板(手前)が掲げられているところがセンター入り口。

写真の向かって右奥が The Storyteller's Garden 入り口。

筆者撮影 (2007年 6月25日)

2) 庭

The Storyteller's Garden は「お伽の庭」とも言える。なぜなら庭に置かれたオブジェ一つ一つにはそれぞれにまつわるお話が存在するからである。無造作に置かれた船の舵・木片・石などにも意味があり、庭にはルールがある。

例えば、庭の奥の木陰には、キノコに見立てた石が輪になって置かれている。Taffy は庭を案内しながら “This is a fairy ring¹⁴⁾. So you can't sit here.” と説明してくれた。この場所は、*Stories from the Storyteller's Garden* (Thomas, 2003) に取められている The Fairy Boots というお話の舞台となっている。路上生活をしてきた男は歩き疲れてとある場所で居眠りをする。男が目覚めると目の前に妖精が現れ、「fairy ring' から出ていけ。」と叫んでいる。妖精は、これから(妖精の)王様の誕生日を祝う宴会がこの場所であるので脱いだ靴を持ってさっさと立ち退くよう男に言う。'fairy ring' を舞台にした The Storyteller's Garden ができる前のお

話である。

また、交流会の席で Taffy が我々に語ってくれた The Gingerbread Man も同著に収められている。このお話には The Storyteller's Garden だけでなく村の諸所と様々な住人が登場する。パン屋から逃げ出したジンジャーブレッド・マン¹⁵⁾ を村人がどんどん追いかけていくお話である。お話には1980年当時、村に住んでいた人々が登場する。Taffy の二人の娘も出てくる。ジンジャーブレッド・マンが通り抜けていった通り、観光案内所、教会、学校、博物館、ホテル、湖は実在する。村全体がお話の舞台なのである。お話の終わりに、赤い狐がジンジャーブレッド・マンをぱくりと食べる場面がある。交流会では野間氏が狐の役を演じ、繰り返しの台詞は全員による唱和となった。聞き手参加型の楽しいお話である。また、灯心草¹⁶⁾ 祭りを手伝う子どもたちへのご褒美としてジンジャーブレッドが配られるという地元の風習についても触れられている点に注目する。

このように、The Storyteller's Garden はお話の宝庫なのである。庭は寛いだり、美しい草木を觀賞したりする場所だけでなく、ストーリーテリングの舞台としても活用できる可能性を秘めた場所なのである。

The Storyteller's Garden in Grasmere



ストーリーテラーの椅子に座った人は必ず語りをしなければならない。

夏には松明がともされ、この庭で多くの人々がストーリーテリングを楽しむ。

天候不順でない限り、屋外のこの庭がストーリーテリングの会場となる。

『語り手たちの会』会員 高橋裕美さん撮影 (2007年6月25日)

2. Taffy の活動

Taffy は現在300を越えるレパトリーを持っている。そしてそのレパトリーは Tale Coat¹⁷⁾ と呼ばれる衣装に刺繡されている。もし聞き手が「このお話を聞きたい」と衣装のどこかを指させば、Taffy のお話が始まるのである。2001年には女王エリザベス二世から MBE 勲章¹⁸⁾ を授与された。授与式にも Tale Coat を身につけて女王に謁見したという。Taffy とストーリーテリングを結びつけたのは言語療法である。35歳の時に突然、脳塞栓症になり言語障害の後遺症が残ったが、ストーリーテリングが彼の言語機能の回復の助けとなったという。倒れる前は劇団を主宰し「火食い奇術師」としても活躍していた。

Taffy の活動の場はグラスミアから海外にまで及ぶ。移動に使うワゴン車の年間走行距離は

3万マイル(約4万8千キロ)である。The Storyteller's Gardenでの活動よりも外部での活動が圧倒的に多い。運転をするのはChrissy夫人である。光藤(2005)によれば、いまだ後遺症のため、夫人が運転手兼マネージャーとして彼の左半身を補っている。2007年度のスケジュールを見るとThe Storyteller's Gardenでのイベント¹⁹⁾は年間14回(復活祭、灯心草祭り、湖水地方夏祭り、感謝祭、クリスマスなど)、外部の活動が84回である。その他に学校の休日にはお話のウォーキングツアーを企画したり、毎月第二火曜日にストーリーテリング・クラブ²⁰⁾の例会を開いたり、CDや著書を出版するなど様々な活動を行っている。

前者と同様にTaffyはストーリーテリングを通して教育支援も行っている。特に、イングランドはナショナル・カリキュラムの管轄地域に入るため、「話すこと」「聞くこと」は重要視されている(山本, 2003)。Taffyは子どもを対象にしたプログラムを次のように年齢別に時間を設定している。

就学前教育	幼稚園・保育園	3歳～5歳	20分
初等教育	幼児学校	5歳～7歳	30分
	初等学校	7歳～11歳	45分
中等教育	中等学校・グラマースクール・その他	11歳～17歳	60分

そして、単にストーリーテリングを聞かせるだけでなく、子どもたち自身による再話を学校側に奨励している。

Taffyはその他に教員・司書・ユースリーダー・学生・子どもを持つ親・祖父母などを対象にそれぞれに応じたワークショップも開催している。

以上のように、一人のストーリーテラーとその妻が借り受けた古い建物と荒れた土地は今では地元の観光名所の一つになっている。お話と庭の融合は聞き手の想像力を一層膨らませ、Tale Coatは聞き手をより楽しませる道具となっている。Taffyの独創的な発想はストーリーテリングのよいお手本と言える。

Ⅲ. まとめ

近年、日本では「読み聞かせ」「紙芝居」「語り」と言った肉声を使ったお話が見直されている。それに伴い様々なサークル・団体が結成され、地域の保育所、幼稚園、小学校、図書館、児童館、院内学級、老健施設などで地道な活動を展開している。このような活動をしている人々の大半はボランティアである。そして、そういった人々への出前の依頼は個人的な繋がりや知人による紹介が多い。その人がどのようなレパトリーを持っているのか、語りにはどのような特徴があるのか、得意とする年齢層はあるのか否かなどの情報を得るのは難しい²¹⁾。また、「サークルに入りたい」「技術を身につけたい」「鑑賞したい」と思っているもどこへ問い合わせしてよいのかもわからない。筆者は英国でのストーリーテリング交流を通して、次の二点に強く感銘を受けた。一つは情報ネットワークのきめ細やかさである。The Scottish Storytelling CentreとThe Storyteller's Gardenそれぞれのサイトから豊富な情報が入手できる。イベント情報、ワークショップの案内、ストーリーテラー名鑑、サークルの紹介など実に

充実している。もう一つはストーリーテリングが社会に浸透していることである。それは単に楽しみだけのものではなく、コミュニケーションに欠かせない「聞く」「話す」といった技能の向上と自己表現力の訓練に繋げている。スコットランドには ‘eye to eye, mind to mind and heart to heart’ という古い諺がある。地元のストーリーテラーがよく口にするストーリーテリングの基本である。イギリスのストーリーテリングは日本の語りの文化をさらに一歩進めるヒントになりうるであろう。

謝 辞

David Campbell氏には京都での「語りコンサート」直後の慌しい中、ストーリーテラー名鑑登録の基準について説明して戴きました。また、帰国後も電子メールで回答を戴きました。心より感謝申し上げます。

註

- 1) 1977年12月に設立。会員は語りの実践者・研究者・愛好者・語りに関心を持つ人々。
- 2) 金沢市在住。『のまひょうしぎの会』代表。小学校教諭時代から紙芝居を始め2007年で37年目を迎える。近年はバンクーバー、バンコク、シンガポールなどでも演じている。
- 3) このようなストーリーテリング専門の独立した施設は稀有な存在である。
- 4) スコットランドの宗教改革者 (1505~1572)。
- 5) スコットランドの詩人・小説家・劇作家 (1921~1996)。
- 6) 1992年に結成。Scottish Storytelling Festival (1989) がきっかけとなり結成された組織。
- 7) Scottish Storytelling Centre はお祭りに協賛してくれる機関を毎年募集している。
- 8) The Scottish Storytelling Centre (2007) *Scottish International Storytelling Festival Online*. Internet. 23rd Oct. 2007.
- 9) 1935年生まれ。エジンバラ出身。Scottish Storytelling Forum の設立メンバーの1人。我々が2007年6月にエジンバラを訪れた際に、自宅でのceilidh (スコットランドの伝統的風習で語りや歌を楽しむ夕べ) に招待してくれた。2007年10月には『語り手たちの会』創立30周年事業として櫻井美紀氏との語りコンサート (仙台・京都) のため来日する。
- 10) 櫻井美紀 (2005) 「イギリスのストーリーテラーの活動」 (<http://www.storytellingworld.net/>) 参照。
- 11) 櫻井美紀 (2005) 「イギリスのストーリーテラーの活動」 (<http://www.storytellingworld.net/>) によれば有名なストーリーテラーでも必ずしも経済的に恵まれているとは言えない。
- 12) 1968年生まれ。チェシャー州出身。ミュージシャン兼ストーリーテラー。The Storyteller's Gardenでの交流会ではハーブの弾き語りも披露してくれた。
- 13) www.visitcumbria.com 参照。
- 14) 民話ではキノコが輪になって生えている場所は妖精がそこで踊っていたからだと言い伝えられている。
- 15) 男の子の形をしたショウガクッキー。The Storyteller's Gardenの道を挟んだ向い側にジンジャーブレッド発祥の店がある。
- 16) 蠟燭の芯に使われていた。
- 17) ハリファックス出身の有名な織物作家Paddy Killerによる作品。衣装代はNorthern Arts and the Arts Council of Great Britainの支援の下、宝くじ基金から出ている。
- 18) 名誉大英勲章第5位 (Honorary Member of the Order of British Empire)。
- 19) 大人5ポンド 家族割引1人3ポンド (大人2名と小人2名の場合: 4人×@£3=£12)。
- 20) The South Lakeland Storytelling Club。1995年4月設立。
- 21) 機関紙などに紹介している場合がある。例: 『子どもの文化 2007年7+8月号』(2007) では各地の紙芝居実演グループ・サークル、紙芝居人名録が紹介されている。

参考文献

- 河合隼雄・阪田寛夫・谷川俊太郎 (2002) 『声の力』 (岩波書店)
- 光藤由美子 (2005) 「イギリス, おはなしがにじみ出る タフィー・トーマス」 (『語りの世界 第40号』 pp.11-12. (語り手たちの会))
- 櫻井美紀 (2005) 「スコットランド, ストーリーテリングの花形 デイヴィッド・キャンベル」 (『語りの世界 第40号』 pp.12-13. (語り手たちの会))
- 田所雅子 (2006) 「私の出会ったイギリス—語り手を訪ねて—」 (『語りの世界 第43号』 pp.60-63. (語り手たちの会))
- 山本麻子 (2003) 『ことばを鍛えるイギリスの学校—国語教育で何ができるか』 (岩波書店)
- Scottish Arts Council. *The Scottish Storytelling Centre*. Online. Internet. 18 Oct, 2007.
- Smith, D. (2001) *Storytelling Scotland A Nation in Narrative*, Edinburgh: Polygon.
- The Scottish Storytelling Centre. Online Internet. 18 Oct. 2007.
- The Scottish Government (2004) *A Curriculum for Excellence - The Curriculum Review Group* Online. Internet. 23rd Oct. 2007.
- Thomas, T. (2003) *Stories from the Storyteller's Garden*, Tales in Trust, The Northern Centre for Storytelling.
- Thomas, T. *Taffy Thomas, the Storyteller of Renown*. Online. Internet. 18 Oct, 2007.